
ラブカクテルス その40

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その40

【Nコード】

N4091D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は大切な友情を記念したカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は大事な友達でございます。

ごゆっくりどうぞ。

僕は転校生。

都会から田舎に引越してきた。

パパの仕事の都合らしいけど、僕にはいい迷惑だった。

周りは見渡す限りの山、山、山。

しかもよくニュースで地震が起こるって、言っている場所らしい。

嫌なところに越してきたものだ。

そんなこんなで、僕は村の真ん中にある小学校に転入しなければいけなくなった。

新しいクラスの子たちは、もの珍しそうに僕を見る。

なんか、ただならぬ空気を感じる視線に、僕は退いてしまったくらいだ。

先生に案内されるまま、教室の真ん中の席に着き、浴びせられる視線の槍をプスプスと刺されながら、僕はそれになるべく気にしない

ようにして、机に刻まれた落書きや、傷を指でなぞって緊張をこまかす楯を構えた。でもあまり役には立たなかった。

授業は気を下ろす余裕もなく、全く頭に入らずに一時間目が終わった。

そのチャイムが鳴ると途端に、僕の周りに人の壁が出来て、何かを四方八方から言われ、その声と、主を合わせるカルタをやっていた矢先にまたチャイムがなり、鉄砲の銃声を聞いた鳥のように、その人垣は散っていった。

その後の長い休み時間は、当然僕の取り調べが始まり、その後は都会の事や、珍しい事という餌を求めて近寄るクラスの子達に、慌てて自分の知識という袋の中に手をつ突っ込んで、手当たり次第に求める話題を投げまくって、クタクタになった。

かなりしんどい飼育係のようだと、うんざりした。

でも、自分には大した事ではない話しても、こっちの方ではかなり興味を惹く事が多いようで、大げさな反応にこちらの方が驚く始末だった。

そんな中、ふと見みた教室の隅っこに、変わった男の子がいる事に気付いた。

どこが変わっているのかと言うと、その子は一人でいるのに笑っているのだった。

そう、さっきから、視界に入る度に彼はやはり笑っていた。

机に座り、何をするでもないのに笑っていたのだった。

僕がその子をジッと見ていると、周りで騒いでいた子達が、あの子はフクちゃんって言って、この村のウジシなんだ。と言った。

僕がウジシ？と聞き直すと、違う子が、ウジシは氏仕って書くんだとも教えてくれ、その子の家が村の守り神を奉っている神社のこの子だと、付け加えてくれた。

いつもああやって、にこにこしてるのだと。

なぜか分からないが、その氏仕という、今までに聞き慣れない言葉に、僕は彼が気になって仕方なかった。

昼休みは給食が出たが、以前とは違って、主食はパンではなくお米。しかも、納豆と蕎麦は健康のために必ず付くそうで、僕はなんだか文化の違いを感じた。

そしてこの日のおかずは焼き魚だった。

僕は魚が苦手だったので、初日からそれを残す羽目になってしまった。給食のおぼんの真ん中に横たわる、その名前もわからない魚は、僕をうらめしそうに表情がない目で睨む。

僕はたまらず、それを片付けようと立ち上がった。すると、後ろから声がした。

その主は、あのにこにこしている不思議な子、フクちゃんだった。その子のか細い声で、よかったらその魚貰えないかな？と、訪ねてきた。

僕は、そのさつきから変わらぬ笑顔に、少し戸惑いを見せながらも笑い返し、どうぞと、おぼんごと差し出した。

彼は本当に嬉しそうにそれを受け取り、後片付けしておくよと、おぼんごと受け取った。そして、自分の席に戻って何をするのかを見ていると、周りには知られないような早業で、その魚をカバンに落とし入れたのだった。

あまりの不可解な行動に、僕は思わず声を挙げてしまふところだった。

ますます僕はその子に興味を惹かれたのだった。

僕は放課後、取り巻く村の新しい同級生を適当にあしらい、何とか一人になって帰り道を急いだ。しかし気付いたときには、この歳で迷子になってしまったようだった。

僕は慌てて、何とか頭に残る薄い記憶を頼りに家路を急いだが、やはり迷ってしまった。

少し興奮気味になって、来た道を戻ろうか迷ったが、もし同級生に途中で会って迷子だなんて知られると、きつとからかわれると思う。なんとか自分だけでこの場を抜け出そうと試みたが、辺りは段々薄暗くなっていき、いよいよそれどころではなくなっていっていった。

僕は半ベソをかいて、もう山合に姿を隠したがる日の光を何とか捕まえて、辺りを見渡した。すると、道沿いに生い茂る林の樹々の間に、石で出来た階段を見つけた。

僕は心細かったせいもあり、人工的な物に人の気配を感じようと、近寄って行った。

その階段の手摺に書いてある文字を読んできると、水神八幡宮と書いてあった。

神社のようだった。

神社といえば、あの子。フクちゃんだ。きっとあの子の家に違いない。

僕は勝手にそう思い込み、その長く伸び上がる白い石の階段を見上げて、これを登るしかないと思った。

大して考える時間などはなかった。

もう日の光が世界の八割から奪われていたからだった。

僕は階段を一気に駆け上がった。

階段の両脇には灯炉が幾つも立てられてあったので、登る足元は意外としっかり見ることができた。

その灯炉はやはり石で出来ていて、不気味な亀を型どり、甲羅の上にはまるでヒトダマでも浮いているような蒼白い火が揺れていた。

苔の取り付き方から、それがとても古いものだとすぐにわかる。しかし、その不気味な亀をいくから見ながら階段を上がっても、一番上は見えてこなかった。

僕は登りながら、あの子はいつもこの階段を登り降りしているのか

と、息を切らしながら膝を手で押し付けながら、無理矢理足を動かして、決して止まることがないように自分の体に命令を送り続けた。喉がカラカラになってきた。それに加えてあまりの周りの重い雰囲気、僕は体力の消費で出る汗より、何かひんやりするもののせいで出てくる汗に、後ろを振り向くことさえできなくなりながら、また、自分の顔が不安な感情のせいで下に引つ張られる感触を感じ、泣き出す手前の気持ちをなんとか堪えて、いつまでも見えてこない階段の先を見つめた。

ハアハアという息の音を、堂々と立ち並ぶ樹々がからかうように響かせる。

僕はだんだんといらいらしてきた。そして涙が出るのを抑えるためもあり、大声を出そうと息を思い切り吸った瞬間、今まで何も見えなかった白い階段の先に、小さな人影が見えた。

僕は少し足を緩め、それを確認しようとしたのと、少しほっとしたせいで、足がもつれて声を出して階段につまづき倒れた。

そして体を起こして見上げると、すぐ目の前に僕を覗き込むあのフクちゃんがいいたのだった。

さっきまで相当離れたところにいたのに、どうやって？と驚いた顔をしていると、フクちゃんも驚いた顔で、どうしてこんな所にいるのかと、聞いてきた。

僕は、慌てて答えようとしたが、うまく口が動かずに、もってしまつて、説明できるまでには時間がかった。

事情を知ったフクちゃんは、相変わらず笑つて、もうすぐ家だからそこから電話すればいいよと、僕の手を引いた。

あれほど先が見えなかった頂上は、なぜかそこからすぐだった。

僕はフクちゃんに言われるがままに、お宮の裏にある母屋にお邪魔して、電話で家に迎えを頼んだ。

受話器を置いて、その家の今時珍しい土間の玄関を見回すと、いくつもの亀の絵や、置物、そして立派なのだろう掛軸が、所狭しと飾

られてあるのに見入った。

もの珍しそうにそれらを見ている僕にフクちゃんは、笑顔でこの村の守り神は亀なんだと教えてくれた。

そしてお宮の本堂に、それを鎮めるお経が書いた札が奉られていて、秋には盛大な祭りも行われると、カレンダーにある活気に溢れた写真を指さした。

そして家にかかるように言ってくれたが、僕はまだ仲良くもなっていない相手に、気を使うのも今の心境ではできそうになく、よそよそしく丁寧にそれを断った。

少し沈黙が漂っていると、フクちゃんはいいもの見せてあげようか？と唐突に僕の手を引き、もう暗くなった境内に僕を連れ出したのだった。

フクちゃんは笑顔で、境内の脇にある池に僕を案内した。

池の中には沢山の小銭が投げ入れられていて、灯炉の灯りがそれに反射して水のオーロラとなって揺れ、キラキラと輝き、とても綺麗だった。しかしフクちゃんはそれを見せたかった訳ではなかった。

フクちゃんは池の縁に並べられた石を、転がっていた別の小さな石ころで、しゃがみこんで何やら叩きだした。

コツコツと何回かその音が波紋を広げながら池に響いたその時、池の反対側にある石がこっちに向かって近寄ってきた。

僕が驚くと、フクちゃんはあれは僕の友達なんだと、また笑顔を浮かべながら言った。

僕はなんで動く石が友達なのかと思った。

それもそうだが、なんで石が動くのだろう。

でもその答えはすぐにわかった。灯りに照らされたそれは、亀だとわかったからだった。

しかし亀が友達？

僕はあまりの幼い発言に、少し笑ってしまった。

そんな僕にはお構いなしで、フクちゃんはその亀を手に乗せると、僕の方に亀を向かせて頭を下げさせて、お礼を言ってきた。

僕はえっ？と戸惑っていると、フクちゃんはお昼にもらった魚のお礼と言った。

どうやら魚はこの亀に食べさせたらしかった。

僕はそんなことかと、大したことはしてないよと言うと、亀はまるで言ったことが分かるように首を上下に振って、本当に僕に頭を下げているようで、僕は指をさして、賢いなーとはしゃいで言った。その僕の笑顔を見て、フクちゃんも笑顔を一層輝かせた。

フクちゃんは亀が自分の気持ちが分かると言った。そして亀の甲羅を優しく撫でると、亀は不思議とフクちゃんの方を向いて笑ったように見えた。そしてフクちゃんはそつと亀を池に戻してやった。

亀は気持ち良さそうに泳いで、また反対岸に戻って行った。

その泳ぐ姿が、池に沈む小銭の光に照らされて、まるでその亀が輝いていて、黄金の亀のように見えたのだった。

それに魅とれていると、後ろから聞き覚えのある声に呼ばれ、振り向くとそこには父さんがいた。

やっとの迎えに僕はほっとして、ため息をもらしながら少し笑った。そしてフクちゃんにお礼を言うと、フクちゃんはまた明日ね。と言って階段の降り口まで送ってくれた。

僕はもう一度お礼を言って、父さんの後に続いて階段を降り始めると、なんと、下にある入口はすぐ近く、すぐそこだった。

来たときはあんなに遠かったのに。

僕は一度立ち止まったが、まあいいかと、父さんの後を追った。

家に着くと、僕は母さんに今日学校であったことを、少し僕の都合がいいような解釈で話し、人気者だったことを強調して喜ばそうとして話した。

母さんは笑顔でそれを聞いていたが、楽しそうな感じではなかった。父さんは静かにお酒を飲みながら新聞を見ていた。

なぜか父さんと母さんは、わざとお互いを避けているようだった。

この頃の二人は、なんとなくそうだった。

僕は歯を磨き、布団に就く前に、おやすみを言おうと、母さんのところに行くと、ドアが閉まったりビングから、微かに二人の声がしていた。

父さんと母さんが何やら話している声。

それに耳を澄ますと、その会話が、いつものもめているような話しだったので、僕はそつと自分の部屋に戻って布団に潜り込み、頭の中にそのことが浮かんでこないように、身体を丸くして膝を抱えて、小さい頃に母さんから聞いた亀のお話を自分で語り、眠るのだった。

次の日朝起きると、どこを探しても母さんがいなかった。

代わりに父さんが朝食を珍しく作っていて、僕に向かって、母さんは用事があつてしばらく留守になるからと、僕の顔も見ずに言ってきた。

僕は黙ったまま、その出されたヤル気がない朝食を静かに食べて、すぐに学校へ逃げるようにして向かった。

母さんは本当に用事で出掛けただけなのか？用事ってなんだ？この先家に、僕のところへ帰ってくるのかを不安に、頭の中でそんなことを考えながら。

学校に着くと、そんなことも当然知らないクラスの子たちが、昨日と変わらずに好奇心を剥き出しにして寄ってきて、僕はその攻撃とも思える過剰な反応に耐えるためにも、今まで身に着けてきた表向きの仮面で応戦した。でも朝の事件が頭から離れなかったせいであまりうまくいわずに、思わず感情的に怒鳴ってしまう結果に、周りは面を喰い、皆は僕の傍から冷たい視線を浴びせながらいなくなっていた。

それでも僕はそれを気にもせずに、逆に一人になれたことで肩の力

をやつと抜くことができた。しかし、そんな僕に例のフクちゃんが近づいてきて、今日は元気がないねと、いつもと変わらない笑顔で声を掛けてきた。

僕はどうせ誰にも今の気持ちなど分かってもらえないだろうし、フクちゃんも僕に都会の物珍しさを求める下心があるに違いないと、昨日の礼を済ませるとさっさと席を立ち、その場から逃げるように教室を出たのだった。

放課後、僕は昨日と違い、周りに誰も着いて来られずに帰ることができて、胸を撫で下ろしたが、校門を出てしばらくしたところの、川に架かる橋のたもとに、隣のクラスの言わばガキ大將的な連中がいて絡まれ、橋の下に引きずり降ろされることになった。しかし、朝からムシャクシャしている僕は、いつもは喧嘩なんて怖くて出来ないし、都会から来たからって何にも特別じゃなく、だから逃げるか、悪くなくても謝り、長い物に巻かれるタイプだが、今回はどうでも良かった。

殴られるくらいが丁度いい。いや、できればそのまま殺されるくらいの方が楽なのかもとさえ思い、わざわざフテブテしい態度でその連中を挑発し、僕は囲まれて体の大きな奴に襟首を持ち上げられ、強烈なパンチを頬にもらって吹き飛ばされた。

地面から突き出た石に手の平が引き裂かれて、口には久しぶりに血の味が広がって、だいぶ前に工作でカッターを使って指を切り、その時くわえた口に、同じ味がしていたことを、一瞬にして思い出した。

そんなことをヨソに、連中は倒れた僕を無理矢理立たせると、今度は腹に拳を射してきて、それはかなり強烈で僕の頭の中を真っ白にただけでなく、今度は腹から口に何かが上がってきて、息ができない苦しさに目から涙を出させ、僕はその心の底からくる惨めさにもっともっとと望んでは、そんな自分をなんだか笑ってしまったのだった。

連中はそれを見てまた苛立ち、僕に近寄るなり幾つもの足で蹴り始めた。

僕は本能的に身体を丸くしてそれに耐え、あちこちランダムにくる痛みに歯をくいしばり、自分の今の姿に満足した。

しかし、いきなりその後には蹴りは突然無くなり、代わりにそれが急ぎ足で逃げる足音になって、やがて消えて行った。

僕は苦しさが少し和らぐのを待って目を開けると、そこにはなんとフクちゃん立っていた。

フクちゃんはいつもの微笑みを浮かべて僕の体を起こして、大丈夫かと優しく声を掛けてきた。

僕は周りを見て、きつと誰かが他にいて、それが連中を追い払ったのだと見渡したが、フクちゃん以外に、そこには誰もいなくて、僕はフクちゃんに不思議な顔を向けると、フクちゃんは僕に肩を貸して橋の上へ歩きだした。

僕はフクちゃんを突き飛ばして、一人で歩こうとしたが、その力がもう残ってなくて、それができずにいた。

フクちゃんは僕を、荒い息を吐きながら昨日の神社、つまりフクちゃんの家に連れて行こうとしていたので、僕は少し戻ってきた体力でようやく体を引き離して、一人で立った。

フクちゃんは微笑みを変えずに振り返ると、家で休んで行けばと言った。

僕は首を横に振って、いや、帰ると一人歩き始めると、フクちゃんは無理だと、また僕の腕を掴んで支えた。

僕はそんなフクちゃんの顔を、なぜか残りの力で殴りつけた。

フクちゃんは、表情抜けした顔で僕を見たかと思うと、目から涙を流した。

そして、とてもまずいといった顔で、その涙を押さえた。

僕はそれを見て、やり過ぎたと思い、謝ろうとした次の瞬間、地震が、かなり大きな地震が起きて、僕は地面に倒れた。

フクちゃんは凄いい形相で僕を見て、僕の手を凄いい力で引っ張り、その場所から離れた。

僕は今まで経験したことがない地震にただただ驚き、そのせいでフクちゃんにされるがままに走るしかなかった。

しかし、事態はそんな単純なことで終わるものではなかったのだった。

なんと、遠目で見る神社のあった山が土煙を挙げて持ち上がっていったのだった。

その光景に僕は恐怖を初めて感じ、脊髄から震えが来るのが嫌でも分かったほどだった。

フクちゃんはしばらく走った所で足を止めて、その山を振り返って僕にまづいと言った。

微笑みを無くしたフクちゃんは、必死な面持ちで、慌ててカバンのポケットに手をつ突っ込んで、何かを探しだした。

僕はそのなかなか収まらない揺れに、あたふたしながらも、再び山を見ると、持ち上った山の下の方と、上の方から、かなり大きな杉の木がわさわさと降ってきたかと思うと、その辺りに穴が開き、信じられない物が、何かの足が出てきて、そしてなんと一番先の方からは頭、もの凄く巨大な頭が、耳が壊れるくらいの鳴き声？とともに姿を見せた。

トガって突き出た牙を光せ、持ち上がったその山は、みるみる内に巨大な亀になった。

フクちゃんは、僕の肩を強く握って言った。

あれは亀神様で、実は氏仕であるフクちゃんが泣くと、それ守ろうと起き上がりフクちゃんの心に宿った闇が晴れるまで、この村、いやこの国、いやこの世界を焼き尽くし続けてしまおうと言ったのだった。そしてその闇を晴らすには、僕の心の闇を、閉ざした本当の心を開ける必要があると言った。

僕はその話を聞いて驚いたが、それならそれでもいいと笑った。しかしフクちゃんはいつも微笑みすら浮かべずに、僕の母さんも亡く

なってしまうかもしれないがいいかと言ってきた。

僕はその言葉にドキリと、何かを打ち込まれたように全ての動きを奪われ、笑うこともできなくなった。

しかし僕は、震える声で強がって言い放った。

大人なんか知らない。いつも自分達の都合で僕の事なんて何にも構っちゃいない。

僕は知っているんだ。本当に僕を思ってくれる人なんて誰もいない。一人もいない。先生も。友達も。上手く、当たり前障りなくやらないと、仲間外れにされる。

そう。僕は仲間外れだ。父さんから。そして母さんから。

僕はそう言いながら泣いていた。そして叫んでいた。

するとフクちゃんは、僕の肩を掴んだ手を離して、僕の両手を包むと、仲間外れになんか僕がしないよと、いつもの微笑みを浮かべて友達になろうと言った。

そしてそのまま目を閉じて何だか分からない呪文を言った。

その途端、二人の手から眩しい光が溢れて、それが亀神様の方に飛んでいき、凄い鳴き声とともに土煙が辺り一面を覆ったかと思うと、山はまた、静けさを取り戻したのだった。

あまりのことに、しばらく僕は目を丸くして動けなかった。

フクちゃんは、僕の手を握っていた手をゆっくり広げ、煙に包まれた不思議な紙を、またカバンのポケットに戻した。

それが神封じのお守りだと言ったフクちゃんの顔は、いつも笑顔に戻っていた。

それを見て僕も、なんだかほっとして笑ってしまうのだった。

今まで、信じられないようなことが目の前で起きていたにも関わらずに。

平和を取り戻した山にはとても温かい色をした夕陽が傾いていたのだった。

僕はその日、初めて本当の友達ができた気がした。そしてその興奮で、フクちゃんと日が傾き暗くなってきても、色々と話した。

フクちゃんは不思議と小さい頃から、泣くと地震が起きて、その度に親や、周りの人に笑うようになだめられ、それがなぜだかを、五歳になるまで教えてもらえずにいた。

氏仕として七五三の五歳を迎えた時、フクちゃんは親から自分の運命を初めて伝えられ、次にフクちゃんに男の子が生まれるまでは、なるべく泣かないようにと、もし泣いた時のためにさっきのお守りの札を授かったそう。

その時はあまり事の重大さに気付かなかったが、ある程度の歳になると、それを自覚したと言う。

フクちゃんは皆のために、いや、世界平和のために笑い続けることを定められて、そしてフクちゃんはそれを、その頃から受け入れたのだそう。

そしてその話しは、村中の人を知っていて、そのせいか、怖がられているフクちゃんには本当の友達はいないと、淋しそうに言った。

僕はなぜそんな大変な運命を受け入れられたのかと訪ねると、フクちゃんは少し笑顔を取り戻して、亀が好きだからと言った。

昔から母親が寝るときに聞かせてくれたお話おかげで。

僕はそのお話しの内容を話して聞かせて欲しいと、ドキドキして言った。

そしてそれは、僕が母さんからよく聞いていたお話と同じだったので驚き、それをフクちゃんにも伝えた。

そこで僕達は共感し、僕も素直な心でフクちゃんと接することができるようになったのだ。

気が付くと、辺りは真っ暗になっていて、そこに心配した父さんが迎えにきてくれていた。

僕はフクちゃんにまた明日と言うと、家に帰ることにした。

なんだか別れた後も気持ちが悪かさを保っていて、心がくすぐったいような嬉しさに包まれていた。

家に着くと、そこには母さんが帰っていた。

僕はその顔が、いつもの母さんの顔に戻っていたようだったので、ほっとして、ただいまと大きな声で話し掛けた。

母さんは、ニュースで大きな地震があったことを知り、用事が思ってたより早く済んだのもあって、今日戻って来たと言った。

僕はクスツと笑ってしまった。

母さんに、久しぶりにあの話をネダツて床に就いた。

母さんは小さい子供みたいと冷やかしたが、仕方ないと言って枕元に座り話してくれた。

昔々あるところに、亀がいました。

その亀はノソノソと何をするにも、体が重くてゆっくり、のんびり、マイペース。

だからそんな亀はよくいじめられていました。でも大丈夫。

亀は嫌なことがあると甲羅の中に引っ込んで、しばらくするといじめていた相手は、背中の甲羅の固さに痛たたと、逃げていきます。だけど、いつもいじめられるのがいやで、直ぐに首を引っ込めてしまふ亀には友達がいません。

亀は思いました。

そんな僕だって友達が欲しいと。

そつしたところに、ある人間の子供がやってきて、亀に友達になろうと言ってきました。

亀はどうして友達になってくれるのかとその子に聞くと、子供は言いました。

僕もノロマでよくいじめられるけど、亀さんみたいに強くなりたい

んだ。だから友達になりたいんだと。

亀は言いました。

僕強いんじゃないんだ。

だって本当は僕、一人でいるのが恐いのだもの。

すると子供は言いました。

だから二人でいよう。そうすれば亀さんはとても強いだろ？

それを聞いた亀さんは笑い、子供も笑い、友達になりました。

そして亀はその子供がいじめられないように守ってあげ、いつまでも二人は仲良く暮らしましたとさつ。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091d/>

ラブカクテルス その40

2011年1月27日03時34分発行